

みて、本当に日本の学会が、貴重な財産を失ってしまったことを痛感し、病魔に限りない憤りすら覚えるのである。

本書『産業構造と消費構造——理論と実証』は、故人の遺業を一橋大学の同僚諸氏が、私と同様な、そしておそらくそれ以上の時子山さんの死を悼む気持をこめて編集された遺稿集である。そこに収められた14編の論文は、どれをとっても故人が執筆された当時はもちろんのこと、現在においても、はるかにその学会の水準をこえる優れた論文ばかりであり、読み返してみても、改めて啓発されるところが多いことに感心せずにはいられない。それと同時に、本書に収められているどの論文を読んでも、読み終わって、ふと気づいてみるとなんともいえないさわやかな読後感を覚えるのは、故人の生前の偏りのない人柄と科学に対する真剣な取り組み方に接するからであろうか。とはいえ、そうした故人の経済学に対する取り組み方を学んで、意志を継ぐのも残された後輩の使命であろうから、故人の死を悼むばかりでなく、その遺業を正しく評価し、その課題に挑戦することもまた、故人へのなによりの饒といえるかもしれない。本書への評論は、すでに多くの方々によってなされており、浅学の徒の加えてなしうることは、ほとんどないといっても過言ではないといえるけれども、氏を失って2年の歳月を経たいま、あえて駄文を呈する由縁である。

時子山さんが生前師事され、おそらくもっとも尊敬されていた経済学者の一人に、W. W. レオンチェフをあげることができる。故人が訳出された『経済学の世界』は、その優れた翻訳によって、レオンチェフの科学としての経済学への志向を見事に伝える名著となっている。その中で、「経済学と数学」というアメリカ数学学会で行った記念講演で、経済学の後進性について、時子山さんの訳文をそのまま引用させていただくと、次のように述べている部分がある。

「…これほど貧弱で皮相的な事実を基礎として、これほど巧緻な理論構成がうちたてられた例は、現代実証科学においては他にほとんどみない。『純粹』理論に含まれるパラメーターの値を実証的に推定することを通じて、その理論をより完全なものに近づけようとする態度は伝統的に少なかった——そしてこの伝統は、今も数理的、非数理的を問わず、現在の経済学者を支配している」。

これは、35年も前になされた講演の記録であるけれども、残念ながら現代においても、昔話として見過ごせない部分を含んでいる。そして、時子山さんの著書を読

時子山 和彦

『産業構造と消費構造』

——理論と実証——

東洋経済新報社 1987. 12 x+241 ページ

時子山さんが亡くなられてから、もう2年余りの歳月が過ぎてしまった。あまりにも思いもかけない御他界だったので、まだ学会の場に、そしてまた街角のどこかに、時子山さんがふと現れて、例のもの静かな面もちで、われわれの議論をただし、示唆に富んだコメントをくださるような、そんな錯覚すら未だに感ずるのは私だけではない。故人の残された数々の論文を改めて紐とい

むと氏の経済分析への取り組み方が、このレオンチェフの批判をまじめに受け止めて、経済学に科学性を求めようとする懸命な努力となって結実しているのを感じずにはいられない。

本書の構成は大きく2部にわかれており、第1部のレオンチェフの産業連関分析の動学化理論の実証的展開と第2部の指数理論にもとづく消費構造の分析とに区分することができる。第1部には、氏が国の経済計画の立案に参画されたおりのターンパイク・モデルによる成果を共同論文のかたちで発表された4編の論文と経済発展と貿易構造の変化に課題をもとめて書かれた2編の論文が収められている。ターンパイク・モデルによる経済計画の策定は、経済発展の目標を量的にとらえられる消費可能性の拡大という点に定めた上で、それを技術条件や要素賦存の制約の中で達成するためには、貯蓄率や生産比率がどのようにならなければならないかを求めるというかたちで問題が設定されている。最適貯蓄率、最適生産比率はいわば、時間的、空間的な資源の最適配分の解をもとめるものであり、経済理論を通じて、望ましい資源配分の規範を探るものである。経済理論から算定される規範が、現実経済の資源配分の善し悪しを評価するための指針を与えるというわけである。経済理論に忠実に模型をくむことによって、現実経済社会を評価する指針を得ようとするこの考え方は、経済理論と実証を結び付ける上で、時子山さんが常に意図されていた基本姿勢のようである。この基本姿勢に基づいて、展開される論理の進め方は、氏の叙述にあつては、あくまで謙虚であり理論に測して求め得ることと、なお分析が施されなくては求め得ないこととの峻別を厳格に付けようとしている点は見事である。第1章の理論の整理は、第2章以下の計画策定時の種々の課題の解決をへて書かれたものといえる。したがって、ターンパイク・モデルの利用についての限界、未解決な課題についての記述もわれわれにとって興味深い。第2章の動学モデルの相対的安定性の理論は、動学化の模型を前方ラグ型とみて、計画モデルとみるか、後方ラグ型とみて、歴史の記述モデルとみるかによって、動学経路の相対的安定性の解釈が異なることを理論的にもとめたものである。実際の経済へのターンパイク・モデルの応用から、モデルの特性として導かれる不安定性和現実の日本経済の安定的な斉一成長という観察事実とのギャップをうめるために理論模型にフィードバックして、理論を再構築するという氏の研究姿勢のあらわれともいえる。第3章のモデルは、ターンパイク・モデルから得られる動学的成長経路の特性をもとめた上で、それを現

実の経済成長経路と対比させることによって、日本経済の成長の成果を評価しようとしたものであり、そこで検出された相対的不安定性という特性の解釈をめぐる疑問の提示が第2章の論文の発端となっているようである。ここで展開されたモデルは、ターンパイク・モデルの現実適用という観点から可能なかぎりその限界を拡張しようとして試みられている。特に、モデル3の展開では、輸出・輸入をふくめる開放模型への拡張、労働供給制約における効率単位の導入、技術進歩による投入係数の変位の可能性の導入、消費構造の変化など体系に明示的にそれを含めることによって、より現実適用的な規範の提示が図られている。それらの実験結果自体興味深いものであるけれども、後進のわれわれがさらにその意志を継承して、改善すべき点も多いようにおもわれる。ここでの投入係数の変化は、外生的に体系外から与えられている。計画モデルとしてのこのモデルの適用には、そうした技術変化の可能性についての緻密な情報が不可欠である。おそらく、そうした情報は、経済学の扱える領域を超えるものかもしれないし、多くの将来技術の可能性についての情報によらなければならないかもしれない。技術のフロンティアが限りなく拡張し、種々の可能性が生まれつつある昨今の状況にあつては、ここで示されたターンパイク・モデルの現実妥当性を高める上で極めて重要な視点のようにおもえる。そしておそらくその場合、時子山さんが意図しながら、資料や計算能力の制約によってなしえなかった、フローの技術変化としての投入係数の変位とストックの構造としての資本係数行列の変化との整合的な内生化的方向をさぐることもう1つの重要な課題となってくるようにおもわれる。

第2部の消費構造についての各論文は、経済成長の目的が国民の消費の豊かさを求めることにあつるとする時子山さんの考え方からすれば、もう1つの氏の取りあげられた課題として、その必然性が浮かびあがってくる。ここでも氏の課題への取り組み方は、理論にあくまで忠実に、現実の消費構造を解明する尺度をもとめようとする真の意味での実証科学者としての姿勢を伺い知ることができる。

第7章以下の消費者選好の理論とそれをふまえた指数論の展望を土台にした第10章の論文は、指数算式の適用がそれを用いる消費構造の特性を踏まえて判断すべきであるという興味深い結論を導いている。効用関数が相似拡大的であるかどうかによって、理論生計費指数の算定が幾何平均を用いるべきか、算術平均を用いるべきかの判定が異なり得ることが明解に示されている。その上

で、習慣形成などによって選好場が変位するような状況のもとでも、log-change型の連鎖指数方式にもとづく算定によれば、比較可能な生計費指数を近似的に求め得ることが示されている。第11章では、指数算定とりわけ消費者物価指数の算定に際して、平均的家計のウェイトが個別に異なり得る家計間の消費構造の差異を反映しないかもしれないという、たびたび繰り返される議論に明確な実証的結論を与えている。氏がここで導いた「…物価変動に対する人々の実感は、個々人のレベルではいかにも主観的で根拠の乏しいものであっても、社会的に集計された場合には、現実の変化をかなり忠実に反映する…」(第11章 p. 180)という結論は、傾聴に値するきわめて重要な実証成果といえる。とはいっても、結論部分で、実感物価上昇率と消費者物価指数との差異を議論することの無意味さをそこから唱えるのではなく、その分析のためには、指数論よりは、むしろ経済心理学的な観点からの接近が有益であろうと述べているところは、いかにも時子山さんらしいとおもわずにはいられない。第13章以下で展開されている各論点については、論者の能力を上回るものであり、批評を述べることができないけれども、各所に氏らしい着眼がみられ、情報理論を礎にした時子山さんの今後の展開が期待された部分である。氏の早世を改めて悔やまざるを得ない。〔黒田昌裕〕